

銀樹

ぎんじゆ
Komichi
Morino

森埜こみち

日下明*絵

Alicekan



アリス館

これは銀色に輝くかがや小さな木の物語。
その木はもしかしたら、
あなたのすぐそばにあるかもしれない。

Alicekan

一章	出会い	7
二章	マボウの教え	21
三章	マボウの手伝い	31
四章	里の市で	44
五章	十二歳の春	55
六章	薬師の問い	60
七章	薬師見習い	67
八章	海渡からの客	87
九章	よい知らせ	108
十章	海渡の薬草苑	111
十一章	わざわい	131
十二章	銀樹の銀	135
十三章	銀樹の呼び声	157
十四章	光	199

Alicekan



一章 出会い

ピシツという音にびくりとして目をあけたシンは、恐る恐るあたりを見た。焚火があり、火の粉が舞っている。なら、いまのは薪がはぜた音か。と思う間もなく痛みが襲ってきた。ううっ。

「マボウさま、坊主が目を覚ましました」

野太い男の声がある。

「そうか」

焚火の明かりに、しわだらけの老人の顔が映しだされた。髪も、眉も、あごひげも白い。いっただいだれた。

老人がシンに笑いかけた。

Alice kan

「粥があるが、食うか」

粥？

「くう、食う」

食えるときには食う。それは、母さんが死んでからシンが学んだことのひとつだった。けれどシンは、ひとりでは起きることができなかった。からだじゅうが痛い。男がシンを助け、背中を支えてくれた。老人にうながされて口をあけると、とろりとしたものが口のなかに入った。ひと口、ふた口は、なんとか飲み込んだ。けど、三口目はできなかった。とろりとしているのはわかるのに、まるで砂でも飲み込むようにしんどい。

「よしよし、ふた口でもいい。食べたんじゃ。食べたなら、だいじょうぶ。おまえは助かる」

老人がいい聞かせるようにいう。

やわらかくしめつたものが、シンのからだに巻きつけられていた。腕にも足にも腹にも。これは？ 目で老人にたずねた。

「イヌザンシヨウの葉をもんで当ててある。打ち身に効くのでな」



打ち身？ 頭の形相が浮かぶのと恐怖がよみがえるのが同時だった。はつとあたりをうかがったが、頭の姿はなく、焚火を囲んでいるのは老人と、背中を支えてくれている男だけだった。

「あの男のことは心配せんでいい。もう二度と会うことはないじゃろう」
老人がいう。

シンは目だけで、もう一度あたりをうかがった。ここは、まるで洞窟のように見える。いったい、どこだ。

「わしらは朽葉の里の薬師でな、おまえをわしらの里に連れていこうと思うとる。助けてやるにはそれしかないのではな」

シンには老人の話していることがわからなかった。わからなかったが、考えることをやめた。考えることなど、できなかった。からだが痛い。痛みだけがシンのすべてだった。

朝になり、ふたたび粥をすすめられたが、シンはもう食べることができなかった。

「ふ、笛の、ね、姐さんは？」

痛みのなかで思い出した、たったひとつの気がかりをたずねた。

「おまえのことをひどく心配しておったひとがいたが、そのひとかの」

老人がシンをのぞきこむ。

「ね、姐さんは、ぶ、ぶたれて、いかなかった？ お、おらのこと、かばって」

「心配せんでいい。ぶたれてはおらんかった」

ならいい。それなら、いい。

「あのひとは、おまえの姉さんか」

「ち、ちがう、けど、ほんとうの、姉さんみたいに、おらのこと、かばってくれた」

老人がうなずいたように見えた。

シンは男に背負われて、山のなかに分け入った。道らしい道があるわけではなく、小柄な老人が木々のあいだについた細い道のようなものを杖でかき分けながら登り、男が続く。シンは背負われながらも、からだを丸めた。そうやって痛みを耐えるしかなかった。

夕方、ようやく里に入った。